

古代日本の神判に就いて（其二）

―火を適用したる神判思想の反映―

白 鳥 清

前回に論述した記紀の物語以外に火神判の記載と思はるゝもの、即ち幾分なりとも其の色彩を顯はしてゐると考へらるものがなほ遺存するかと云へば、古事記の稻羽之素戔物語の條に連續して描寫されてゐる手間山の物語は明らかに其の一つであらうと思惟される。いまその文を示すと

於是八上比賣八十神に答へけらく、「吾は汝等の言は聞かじ。大穴牟遲神に嫁はむ」と言ふ。故爾に八十神怒りて、大穴牟遲神を殺さむと共議りて、伯伎國の手間の山本に至りて云ひけるは、「此の山に赤猪在るあり、故和禮共追ひ下りなば、汝待ち取れ、若し待ち取らずば、必ず汝を殺さむ」と云いて、猪に似たる大石を火以て燒きて轉ばし落しき。爾追ひ下り取る時に、其の石に燒き著かえて死せたまひき。爾に其の御祖命哭き患ひて天に參上りて、神產巢日之命に請したまふ時に、乃ち蜺貝比賣と蛤貝比賣とを遺せて作り活さしめたまふ。

と云ふのである。この物語によれば求婚に於いて失敗した八十神等はいたく怒りて協議の結果、赤

熱せる猪型の大石を手間の山上より轉下して婚姻成功者なる大穴牟遲神に待ち受け取らしめ給ふこととした。そこで大穴牟遲神は若しも其の石を受け取らざれば殺されるといふのでやむなく八十神の言に従つて受け取つた處、その石の爲めに燒死するに至つた。これを知つた御祖命は痛く哭き患ひて蜺貝比賣と蛤貝比賣に依頼して一旦燒死せる御神をまた復活せしめたといふ記事である。この物語の如き一見單に大穴牟遲神を中心として語られた秩序なき興味本位の物語神話である如く考へられるが、自分にはその秩序なき如く考へられる物語にも物語作製當時の思想が名残りを留められて居るのであり、慣習が反映して居るものと考へられるのである。

扱て大穴牟遲神は、別名を大國主神とも云ひ、また葦原色許男神とも、八千矛神とも稱されてゐるが、その表示されてゐる名稱に據つて之れを判定すれば、勇武の神であり威大なる神格であらせられたことが想像せられる。即ち色許男は、醜女などいふ名稱で神代史の別所に見えるので分る如く、見憎い表情を示すと共に萬葉集などに「しこのますらを」など歌はれた時と同様に、雄け武けしい有様をも顯はして居り、また八千矛といふ名稱はその中に劔矛の如く鋭くまた殺伐なる意味が含まれてゐると考へられる。而してその勇武の點で近隣諸方に大名を博するに至り、次いで大國を領有するに至つたので大穴牟遲神即ち大名持つ神となり大國の主といふ名稱が起つたのであらう。この外にも大物主神とも、大國玉神とも、宇都志國玉神とも稱せられて居るのは、有名な神であらう。

せられたので或は領主とか或は美稱として賞め敲へられたので附せられた名前であることが考へられる。

然らば、斯くの如く希れなる勇武の神が何故に八十神の爲めにかくも容易に焼石によつて焼死せしめられたか、物語に表はれてゐる點では、此神が威大であればある程、平凡に焼死する點が承服されないのである。

抑もこの御神は、古事記によれば、須佐之男命と刺國若比賣命との間に御生れになられた御神であらせられたのである。須佐之男命は、青山を枯山となし、海河を悉く乾かし、惡神の音、狭蠅なはは如なす皆満みき、萬の妖悉く發りし程に啼き給ひしことがあつたが、また其の御行動も頗る荒ら荒らしかつたので、或は營田みつくたの阿離あち、其の溝を埋め、或は殿に屎を散布する如き、更に、服屋はたやに於いては衣織女の仕事を妨げることなどをなしたので、恰度啼き叫びし時と同様に、狹蠅那須皆満なすけみき、萬の妖悉く發つたのであつた。それが爲めに天照大御神の岩戸がくれの物語となり、終に萬の神々の神計りの結果、須佐之男命は、千位置戸を負せられ、鬚と手足の爪とを切り祓へしめられて、やはるゝに至つたのである。斯くの如き有様であつたので、物語の順序として須佐之男命の御子となられて居る大穴牟智神は、縦し後には非常に優れたる御心の神となられ、武勇秀でた神となられたとしても、その初めは、赤熱せる石の爲めにも焼死する運命となつて居られたやうな筋の物語を組

織せられたのであらう。これは恰度垂仁天皇の御子譽津別王子が御母沙本毘賣命に adultery の行爲を疑はれた結果、御母の因果の報を蒙つて八拳鬚心前に至るまで眞事登波受の有様であつたと同様に、大國主命は、萬の妖悉く發る如き荒んだ行爲、流石の天照大神すらも岩戸に御隠れ給ふたといふ如き惡行爲をなし給ふた須佐之男命の御子と生れたので、縦し御自身は、何等犯したる罪科はななくとも expiatory suffering の有様に置かれると見らるゝのである。而し他の御子には之れなく、大國主命にのみあるといふのは、其處に Contradiction が有ると論ずる者もあるかも知れないが、それは物語の Center は須佐之男命と大國主命にあつて、後を嗣ぐ神は、この大國主命であつたからのことであらう。而してこの御神は焼死後御祖神の力にて復活せしめられたが間もなく、また八十神の爲めに氷目矢を離たれて拷ち殺されたことがある。古事記に

於是八十神見て、且欺かたきて山に率りて入りて、大樹を切り伏せ、茹矢ひやを其の木に打ち立て、其中に入らしめて、即ち其の氷目矢を打ち離ちて拷ち殺しき。爾亦其の御祖命哭なきつゝ求もとげば、見得て即ち其の木を析さきて取り出で活して云々

とあるがそれである。此の場合も、焼死せしめられた時と同様に、再び御祖命の情の爲めに復活せしめられてゐる。先きの焼死せしめられた時の物語を expiatory suffering の状態と觀ることを許さるゝならば、此の場合も、また expiatory suffering と見られると思ふ。

其の後御祖命は、大國主命に「汝此間にあらば、遂に八十神に滅ぼさるゑ」と告り給ふて、須佐能男命の坐します根堅洲國に參向せしめたまふたのであつた。

扱て須佐之男命は、物語に見ゆる處では、勿論武勇の神であらせられた。その結果惡行爲と見らる可きものが多く、諸神達に神やらひにやらはれ、罪科に問はれたのであつたが、大國主命は、或は焼死し或は拷殺されねばならないやうな性格の所有者であつたかと言へば、決して他神を苦難に陥れたといふこともなく、不道德の行爲などは微塵も見當らなく、それ處か、稻羽に行く時の如きも、帑を負ふて不平も言はず八十神の從者となつて行つたり、八十神が素菟にいつはり教へて鹽を浴み吹く風に身體を當らしめて之を苦しめて居るのに、大國主命は淡水もて洗はしめて蒲黃の上に輾轉せしめて居り、動物すらこれを救助して居られ、其徳は寧ろ廣大である、日本書紀にも「夫の大己貴命と少彥名命と力を戮せ心を一にして、天下を經營る。復た顯見き蒼生、及び畜産の爲めに、則ち其の病を療むる方を定む、又鳥獸昆蟲の災異を攘はむ爲めには、則ち其の禁厭の法を定む、是を以て百姓今に至るまで咸く恩賴を蒙れり。」とあるのでも分る。それ故に大國主命が苦難に逢遇して居るのは解し難いのであり、従つてそれをば *expiatory suffering* と見なければ解されないのである。それで史實は必ずしも須佐之男命の小供が大國主命であつたといふのではないが、兎に角、獨立した物語にしても作者が親子の如く系圖を附して居つて、その子供が苦難に遇つて居るやうな物語となつてゐるのを見れば、作者在生時代には親の因果が子に報ゆるといふ思想があつて、それが物語に反映してゐると見るより仕方がない。最も善事をなしたのが善果を得るとか惡行爲あれば惡結果を生ずるといふが如き道德律に左右されないやうな未開の時代もあることはあるが、而して神は善人のみに味方せず惡人と雖も自分に犠牲を捧げるものには味方するといふ利己主義的な神もあり、従つてかゝる神はその民族が道德觀念の進歩しない時に創案された神であると見られるから、之れに比定して大國主命の如き何等惡業なき神も焼死したり拷殺されたりするに至るのであつて、別にそれに原因を求めなくともいゝし、偶然性であると考へられるかも知れないが、古代日本の神話は、製作年代より論じて、潤色した作者の頭腦より推察しても、他に示されてゐる物語から觀察しても、大體道德律のないやうな時代のものとは見られないから、さう考へるのは頗る無理が生じて來ると思ふ。

然らば、*expiatory suffering* として、赤熱せる石に焼死せしめられたといふ如き物語、茹矢を打ち離ちて拷ち殺したといふ如き物語は何を意味してゐるだらうか、如何なる觀念が伏在してゐるのであらうか。

生れ出てたばかりの子供が、疑惑を蒙つてゐる母親の *adultery* の有無を驗する爲めに、或は水中に棄てらるゝ場合があり、或は火中に置かるゝ場合があり、また同時に母親自身が或は森嚴なる

oath を立つ、adultery であることと盟ふとか、火神判によつて身の潔白を證明し、夫の疑惑を解かんとするとかいふ風習も世界の文明未開の諸民族間に多く見らるゝ慣習であるが、之れは individual ordeal とし、習慣と觀じ、father's recognition の風俗と見れば別に不思議はないのである。さやその母親が test としつゝの oath をなす例を古代のウェールズ人にとると、

Among the ancient Welsh it would seem that there was no binding recognition by the father until the mother had first taken a solemn oath upon the altar and the relics that he and none other was the father. If the father then did not deny the child by an equally solemn ceremony within a year and a day, he could not afterwards deny him. The mode of reception into the kin was by a kiss; for a kiss, says the Code of Gwynedd, is a sign of affinity.

とある如きはそれである。⁽¹⁾而して生出の小供とは無關係で、adultery の嫌疑を露す爲めに婦人はその ordeal を試みねば Dire 族の例を云ふ

Dire punishments are frequently meted out to the wife even on the slightest suspicion, or, as among the Negroes of Calabar, the wives are at intervals put through a trying ordeal to test their faithfulness.

とあるのがそれである。⁽²⁾それからまた羅馬人は婦人の貞節を證する ordeal を行つたことがある。

その文例を記す E. R. R.

Another chastity ordeal is recorded in connection with a dragon's cave in the precinct of the temple of Juno at Lavinium (Aelion, nat. An- XI. 16). On stated occasions the priestesses entered the cave blindfolded, bearing a barley cake to be consumed by the dragon. So long as they remained chaste, the sacred animal accepted their offering; but, if it was sensible of pollution, the cake was left untouched, and was subsequently broken into small fragments and removed from the precinct by the ants which feed as cleansers. The guilty woman was then traced and punished.

とある如きはそれである。⁽³⁾

而して母親の ordeal なるものは疑惑を抱かれたこと、それが既に罪と見られるのであるとすれば、苦難の oath 苦痛の ordeal に置かるゝのは一種の expiatory suffering であると考へられるが、その子供は何事をも自覺して居らないのであり、自身は何等の罪もなく、而も生れ乍らにして火に置かれ、水に棄てられるとすれば頗る不合理の感に打たれるのであるが、而も事實に於ては、かゝる例も甚だ数多いのである、例へて見ると古事記の中でも、木の華開耶毘賣命も火の神判に身を置いて居られるが、同時に、其の御子火照命、火須勢理命、火遠理命もまた火の神判を受けて置られる

のである。⁽⁴⁾ その外にも佛國記に、

恒水上流有一國王、王小夫人生一肉胎、大夫人妬之言、汝生不祥之徵、即盛以木函、擲恒水中、不流、有國王遊觀、見水上木函、開看見于小兒端止殊特、王即取養之、遂便長大、甚勇健、所往征伐無不摧伏。

と見ゆる例の如きもまたそれであらう、この點に就いては東洋學報十六卷第三號に、古代支那に於ける神判の一型式といふ拙稿中に多くの例證を列舉して置いたから参照せられたいと思ふが、その他、古代 Norse 人の間にも行はれてゐたので例文を示すと、E. R. E. に

Among the ancient Norse the child was laid on the earth when born, and not lifted up until the father gave permission. This permission decided the child's fate, for otherwise it would have been exposed or put to death; but doubtless it involved also an acknowledgement of paternity. Recognition by the father involves reception into the immediate kin.

とある如きは、それであり、また Celt 人の間では、Fraser 氏の Folklore in the Old Testament に

Thus the Celts are said to have submitted the question of the legitimacy of their offspring to the judgement of the Rhine; they throw the infants into the water, and if the babes were

bastards the pure and stern river drowned them, but if they were trueborn, it graciously bore them up on its surface and wafted them gently ashore to the arms of trembling mothers.

とあり、中央アフリカの例を示すと同じく Fraser 氏は

In the Central Africa the explorer Speake was told "about Ururi, a province of Uuyoro, under the jurisdiction of Kimiziri, a noted governor, who covers his children with beut ornaments, and throws them into the N'yanza, to prove their identity as his own true offspring; for should they sink, it stands to reason some other person must be their father; but should they float, then he recovers them."

と言つて居る。それから子供が生出しない以前に母親は未だ adultery といふ嫌疑を受けなかつたが、生れた子供が双子であつた場合には新生兒を exposure するのである。ウェスタコーク氏が此の exposure なることを述べて次ぎに、

If the child was born out of wedlock, or if it was deformed or sickly, or if it was born on an unlucky day, or in case of twins—one of whom was always supposed to be illegitimate—and ⁽⁵⁾ *one of them* was always supposed to be illegitimate—

Among various savages it is the Custom that, if a woman gives birth to twing one or both of

them are destroyed. They are regarded sometimes as an indication of unfaithfulness on the part of the mother—in accordance with the notion that one man can not be father of two children at the same time—sometimes as an evil portent or as the result of the Wrath of a fetish.

と言つて居るのを見ると、生出子の状態によつて生母が *adultery* であつたらうといふ疑ひを受けることの例があることも分る。

それ故に最初より行爲を疑念視せられた親の子供が生れてより直ちに *ordeal* に置かるゝのも、また双児の現象が嫌疑の動機となつて、その双児が *ordeal* に置かるゝのも同一心理であらう。そこで上述の例は *ordeal* を科せられたのであるが、而も子供としては、何等自覺しての惡業をなしたのではないから、従つて母子の關係が甚だ濃厚なものと考へられ、子供の受ける *ordeal* は即ち母親の受けると同様に思惟され、母親の *ordeal* は子供の *oath* と同等に思はれた結果であつたらうと思惟されるのである。

然らば、何等の惡行爲もない者が苦難の鞭に置かるゝといふ物語なども、此の思想の延長と見られはしないか。無心の子供が *ordeal* に置かるゝのは母が罪の疑惑を掛けられたが爲めであつた。何等の惡行爲もないものが苦難の境遇に置かるゝといふ物語は、その子供はその母なり、父なりの

惡行を身に受けてゐるといふ考へからであらう。此の思想は因果關係を含んでゐるので思想上可なり發達したものゝやうにも思はれるが、母子は同一に考へられた關係が早く既に認められるとしたならば空ち新しいとも限らないのであるかも知れない。

すすれば生児が *ordeal* に置かるゝを *expiatory suffering* と見ることが出来ると同様に *expiatory suffering* を受けてゐる種類のものも、*ordeal* の形式によつて *suffering* を受けてゐることがあり得るのである。前に述べた譽津別の王子の例の如き、また此の論文に述べて來た大國主の命の場合がそれではなからうか。

さすれば此處に燒石を持つて來てゐるのは、縱し大國主命の場合では、完全なる *ordeal* の *type* を具備してゐないとしても、後に説明する如く、燒石を握らせて以て被判人の罪の有無を判定したといふ *fire ordeal* の方法が當時存在して居り、神代史の著者はそれを見聞して居つたので、その風習が、作者の頭腦を一旦通過して變形され、それが物語の中に取り入れられたのではあるまいかと思はれる。

處で此の大國主命が、一旦燒死したが御祖命の取りはからひで蘇生せしめられた。然るに再び八十神の爲めに欺かれて山に率ひられて、氷目矢を打ち離ちて拷殺せられたのであつた。然るに此の場合も幸にまた御祖命の力により蘇生することが出来たが、その後御祖命の仰によつて、須佐之男

命のまします根の堅洲國に參向することゝなしたのである。此の處を以て物語は順序を轉換して居ると見られる。然るに根の堅洲國に於いてまた焼石とは別に直接火に關係しての物語がある。最も根の堅洲國では、須佐之男命は、大國主命に對して種々困難な（*tanaka*）をやつて居られる。而して偉大なる人物が態々な（*tanaka*）を課せられるといふ物語は、古今東西の文献にその例は乏しくない。先づ漢民族を初めとして其の周圍の諸民族などに於いても多く發されるのであることは既に拙稿古代支那に於ける神判の一形式中に列擧して置いたし、王充論衡の古驗篇などををも参照すると分るが、此の大國主命の場合もまたそれらの例類の範圍に入れて（*tanaka*）と見られるのである。而して此の（*tanaka*）は結局その人物の賢愚とか、善惡を試み驗するのであり、有徳者か不徳者かを神の示現によつて知らんとするのであるから、*ordeal*と見てゐるのである。

そこで大國主命が、蛇の室に入れられた物語や、また吳公や蜂の室に入れられた神話に就いては恐らくそれも神判の一形式と思はれるのであるが、それは後段に敘述するとして、茲では當面の問題である火に因る（*tanaka*）の物語を示すこととするならば、古事記に、

亦鳴鏑を大野の中に射入れて、其の矢を採らしめたまふ。故其の野に入ります時に、即ち火以て其の野を焼き廻らしつ。於是出でむ所を知らざる間に、鼠來て云ひけるは、「内は富良富良、外は須夫須夫」如此言ふ故に、其處を踏みしかば、落ち入りて隠りし間に、火は焼ゆ過ぎぬ。

爾に其の鼠其の鳴鏑を昨ひ持ち出で來て奉りき。

とあるのがそれである。

これは明らかに火の（*tanaka*）であると思ふが、此の物語に表示されてゐる大國主命の神格は最早や依然袋を背負ふて八十神の從者となつて稻羽に行つた頃の大穴牟遲命と同一ではなくなつてゐるからして、物語の筋は、其の火の爲めにも決して焼死するといふ如きことにはなつて居らないのである。反對に鼠の爲めに救助されて、兎に角安全に、焼え盛る火から其の身を保持し續けて居られるのは、須佐之男命が科した火の（*tanaka*）に成功してゐると見られるのである。

扱て直接に火を以て（*tanaka*）の形式をなしたといふ物語に移つて來るが、火中に於いて其の身を安全に保持することを得たといふ例で、此の大國主命の之れに類してゐるものは、倭建命が大夷征伐の折に、相武の國に到着せられた時の物語にも見えてゐるものが有名である。即ち、古事記に

故爾に相武國に到りませる時に、その國造詐りて白さく、「此の野の中に大沼有り。是の沼の中に住める神甚く道速振る神なり」とまをす。於是其の神を看行しに其の野に入り坐しつれば、其の國造其の野に火をなも著けたりける。故欺かえぬと知しめして、其の姨倭比賣命の給へる囊の口を解き開けて見たまへば、其の囊に火打ぞ有りける。於是先づ其の御刀以て草を薙り撥ひ、其の火打を以ちて火を打ち出で、向火を著けて、焼き退けて還り出でまして、其の國造等

を皆切り滅し、即ち火を著けて焼きたまひき。

とあるのがそれであるまた日本書紀には、

是の月、日本武尊、初めて駿河國に至ります、其處の賊、陽り從ひて、欺きて曰く、是の野に麋鹿甚だ多し、氣は朝霧の如く、足は茂林の如し、臨して狩りたまへと、日本武尊其の言を信たまひて、野の中に入りて兎獸したまふ、賊、王を殺さむといふ情あり、火を放けて其の野を焼く、王、欺かれぬと知めして、則ち燧を以て火を出して、向焼つけて免るゝことを得たりとある。

扱て此等の記載は、其の物語を獨立した物語として考ふる時は、必ずしも之れを fire ordeal に關連した叙述であるとは言はれないかも知れないが倭建命と賊とを原被兩告と見る時には、野の中の火を中心して、欺きしものと、欺かれたるものとが火の神判に置かれて居るやうなものであつて、欺きし者即ち惡心なるものが如何に欺かれしもの即ち正心あるものを焼き殺さんとしても、到底成功することを得ないので、物語に示されてゐる如く向火となつて、却つて賊等がその火もて焼死するといふ運命となつたのであり、倭建命は野火に於いても何等傷害を蒙らなかつたので正心が證せられた形となつてゐる。さすれば此の物語の中には、恰度、武内宿禰と甘美内宿禰が熱湯にて mutual ordeal をなしたと同様な思想が含まれてゐるやうに思はれる。ただそれが神話の形式であり物語の

形式である關係上、作者は興味中心に物語つてゐる點で、一見しては其の中に ordeal の思想などあることが分らないが、その根底には當時の思想として、火の崇拜とか、その崇拜にからんで火を以て test するとか、裁きをなすとかいふ慣習が存在してゐたので、自然にそれが加味されるに至つたものと思はれるのである。

それ故に、大國主命が野中に火を放たれたが然もその身を安泰に保持したといふ裏には、偉大なる人物が否かを yes する思想があると思はれるが、倭建命の場合、野中に火を放つた時には賊が却つて焼かれるに至つた物語には正義のものは火の ordeal に勝ち、欺瞞者は敗るゝといふ思想が認められる。何れにしても正義の人物は偉大なる人物といふことに共通するので、此の兩者の物語には主人公となつてゐる人物は縦し一時は苦しめらるゝことがあつても、偉大なる人物であるならば火を以てしても焼殺するを得ないし、その他如何なるものを以てしても、傷害を蒙らせることをもなし得ないといふ思想があつたのであり、換言すれば、正しき者は熱火を以てしても傷害を蒙らないといふ固い信念が當時の思想界に存在してゐたのであらうと思ふ。

さすれば、これ等の物語は、正か不正か、善か惡かを判定するに火を以てし、正者はその火の ordeal に無害であるといふ思想と何等異なる處がないのである。即ち此等の物語には火神判の反映があると考へられるのである。

而して一方にまた刑罰思想に火を以て焼き殺すといふ思想があるのは、刑罰にまで未だ到らない階段即ち刑罰を定める時の火神判と、思想的に一脈の關係があるものと思はれる。それは、*outlet* の思想と、刑罰の思想とは發達の程度の差であつて、近く「法の起源と牢獄の思想」といふ論文に於いて述べんとするが、動物の神判をなしてゐる處では、また動物をして踏殺せしむる刑罰が存在してゐるのであつて、それは火神判と火刑にも矢張り共通な點があると認めるのに参照されるところ。日本書紀雄略天皇の條に、

二年秋七月、百濟の池津媛、天皇の幸さむとするに違ひ、石河楯に搖けぬ、天皇大に怒りて、大伴室屋大連に詔して、來目部をして夫婦の四の支を木に張りて、假^{きさき}度の上に置き、火を以て焼き殺しつ。

とあるのは *adultery* に對する刑罰として、火刑に科せられたのであることが分る。

此の火刑が上代日本に存してゐたらうと思はるゝ文献は、なほ欽明天皇紀の註文に見えるものもそれである。二十三年六月の條に、

是の月、或馬飼首歌依を讃つことあり、曰く、歌依の妻、逢臣讃岐、鞍轡異ることありと、既にして熟視すれば、皇后の御鞍あり、即ち廷尉に收す、鞠問ふこと極切し、馬飼首歌依、乃ち揚言して誓ひて曰く、虚なり、實にあらざ、若し是れ實ならば、必ず天の災を被らむと、遂に

苦問に因りて地に伏して死にぬ、死して未だ時を経ざるに、急に殿に災あり、廷尉其の子守石と名瀬氷とを收縛へて火中に投いれんとして（火に投じて刑を爲すこと。蓋し古の制なり）咒りて曰く、

云々とある文の中で火中に投げいれんとする條に注を施して、「火に投じて刑と爲すこと蓋し古の制なり」とある句が見える。この句は火中に投ずる條の註であつて之れを火刑と見る點には自分として賛意は表されないし、既に其の註者の誤れる點を指摘して之れを論じたことがあるので茲に再び繰り返すことをしないが、然し雄略天皇紀などを参照してみると、古代に火刑と云ふことがいはれてゐたことであつて欽明天皇紀を註した後世の註者の頭中にも、猶ほ火刑と云ふ觀念だけはあつたのであらうと思はれる。註者時代にもかゝる風習が存してゐたので火に投ずるをも火刑と考へて註を施したものであつたらう。此の火刑と云ふ慣習存在の推定は、火神判の存在を更に有力なるものとするのであつて、アイヌ族間などに於ては、

Batcheler 氏の *Ainu and their Folk Lore* に

The barbarous hot water ordeal also Consisted one mode of punishment. とあるので、これによつて見ても神判と刑罰の兩者が同時に行はれたことを示して居る。

動物を以てしても、其の例が見出されるので例へば梁書文身國傳の記載には猛獸神判と猛獸によ

る刑罰の兩觀念が見えるし、また海語暹羅の風俗の條や、諸蕃志注贊國の條などを参照すると象の神判の例が見えるが唐書二二二卷驃國の風習を見ると象神判の例が見えるのである。

それ故、古代日本に若しも火刑の如き殘酷な刑罰が存してゐたとすれば、同時に火の ordeal の如きものも存してゐたことが逆推されるのである。

殊に火を以て燒き殺した雄略天皇紀の例が *adultery* 罪科の爲めであつたのを見て、一方木花開耶毘賣の例は、*adultery* の有無を驗する爲めに火神判を用ひたのであつたのであるから、此の二者の觀念が同時に存してゐたと見ても差し支へはないのである。

そこで此の火焰の中を通過する如き有様、即ち大國主命が燒き付けられた野火の中でなほ且つ安泰であつたといふ如き、また倭建命が賊の放つた火焰にも傷害を蒙らなかつたといふ如き例は他にはないものかと究めると、後になつて、日本の中世期に於いても火若しくは火焰を使用して犯罪の有無を決定した *ordeal* なるものが存してゐたことは文献には鐵火、又は火起請といふものがあるのでも分るが、近世になつて外人の渡來によつて、日本の風俗を見聞した其の記錄によれば、*Kämpfer* の *The History of Japan*, English trans. p. 235 に於いては、徳川時代に於いても不動の靈前に於いて、火中を三回通行する *Fire ordeal* なるものがあつたことが分るし、日本西教史にはまた鐵火の方法があつたことを記してゐる。而してまた火焰神判は印度などにもあつたものであつて、*The*

Cambridge History of India 2.

We have also very little information regarding civil law. The use of an ordeal in this connexion is attested only by the case of Valsa who proved his purity of descent, which was assailed, by walking unharmed through fire.

Elliot, *The History of India*, 2 vols. 2nd ed. 1890. 記載がある。

William Crooke, *Things Indians*, p. 220. Buchanan Hamilton の記載を用いて、

Women who suppose that the goddess has inflicted on them barenness or other great infirmity vow to work barefooted on the red hot coals before the temple. If the goddess hears their prayers, she prevents the coals from burning their feet. My informants impudently assert that the ceremony is frequently performed. A quantity of red hot coals are spread before the temple, and the woman, after having fasted a whole day, walks three times slowly with bare feet over the coals.

と言つて居るのも火焰通行の ordeal と同一と見られるものである。其外 E. R. E. に火中を通過する ordeal の例を擧げて居る。即ち

It has always been known in India, a heap of burning pipal leaves being used. The virtuous

Sita proved her innocence to her husband Rama by passing through the fire.
とある Iranian によ

The Iranians seem to have used not only the ordeal in which molten metal was poured on the chest, but also walking on fire.

とあり、また siamese の例として、

The Siamese walk over a pit of burning charcoal

とあり古代歐洲人間での風習を、

In early Europe the hand was held in a fire, or the person walked between two masses of burning logs.

と述べて居る。

これ等の例は殆ど日本の中世の火焰の中を通る例と同様な神判であつて見れば、之れにより逆推して、古代日本に野火を放されて安泰であつたといふ例の如きは神判の影響であるとも差し支へはないのである。

而してまた P. C. L. P. 84 2

The folk custom of leaping over bonfires is a survival or playful adaptation of these ordeal

など言つて居るのを見ると近世まで日本にも篝火を飛び越える風習が *Shaman* の行事としてあつたが、それを *Ordeal* の名残りとも見ることを許されるならば、其の風習より、更に古代の野火に安泰であつたといふ傳説に説き及ぶと、確かに、大國主命及び倭建命の火焰中に安全であつたといふ物語には火神判の思想が反映してゐると見て差し支へはなからうし、更に大國主命の *expiatory suffering* の状にあると見られた焼石の爲めに焼死したといふ物語の如きも直接の火が焼石に變化されてゐるだけで、矢張り火神判の影響を認められるのである。

註

- (1) E. R. E. Vol. 2. p. 640.
- (2) E. R. E. Vol. 1. p. 122 及び Miss. Kingsley, *Torvels in West Africa*. p. 437.
- (3) E. R. E. Vol. 9. p. 529.
- (4) 東洋學報、第十四卷、第二號。拙稿古代日本に於けるオールデアルに就いて (其一) 參看。
- (5) E. R. E. Vol. 2. p. 640.
- (6) Frazer, *Folk Lore in the old Testament* Vol. II. p. 455.
- (7) Frazer, *Op. Cit.*, p. 455.
- (8) Westermarck, *The Origin and Development of the Moral Ideas*. Vol. I. p. 403.
- (9) Westermarck, *M. I.* Vol. I. p. 395.

古代日本の神判に就いて(白鳥清)

- (10) 東洋學報、第拾六卷第三號、拙稿古代支那に於ける神判の一型式參看。
- (11) 東洋學報、第拾五卷第一號、拙稿、古代日本のオールテアルに就いて、參看。
- (12) Barcheler, Ainu and their Folk Lore, p. or 87.
- (13) The Cambridge History of India, Vol. I. p. 134.
- (14) Elliot, The History of India Vol. I. p. 229.
- (15) E. R. E. Vol. 9. p. 510.